

クールな女上司と、手違いの相部屋出張――嵐の
夜、完璧な課長が年下の前で崩れる――

嵐で缶詰の一室。完璧な課長が、年下の部下の前でだけ女の顔になる夜

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

社内の誰もが、桐谷李奈きりやりなを「完璧な人」と呼ぶ。

営業企画部の、いつも涼しい顔をして、隙がなくて、誰にも甘えない美しい上司。

——その人が今、嵐の音に包まれた狭い一室で、俺の腕の中で、別人みたいに息を乱している。

窓の外では、夜半の嵐が荒れ狂っていた。叩きつける雨が硝子を白く濡らし、強い風が建物のどこかを鳴らしている。電車はとづくに止まり、この見知らぬ街には、もう二人を外へ連れ出す手立てはなにもない。間接照明だけが灯る部屋に、世界からぽつんと切り離された時間が満ちていた。

昼間の李奈を思い浮かべる。先方の重役の鋭い問いを涼しい顔でいなし、こちらの条件を一つずつ通し、誰の前でも背筋を伸ばして立っていた女性。社内の人間が口を揃えて「あの人には隙がない」と言う、あの冷たく整った横顔よこがお。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、とろけるように呼んでいる。

「……直人」

ベッドの上、二人ぶんの体温だけが満ちた狭がりで、李奈がこちらを見上げた。いつもきつちりとまとめている黒髪はほどけ、白い首筋や枕の上に幾筋も乱れて広がっている。眼鏡を外した切れ長の目もとは潤みきつて、職場で見せるあの冷ややかさは、もうどこにもない。

部下を率い、取引先を黙らせ、誰の前でも背筋を伸ばしているあの人が。たった一夜の出張の、嵐で閉じ込められたこの部屋でだけ、すべての鎧を脱ぎ捨てて、頼りなく、甘く、崩れていく。

ほんの数時間前まで、二人のあいだには、上司と部下という、越えてはいけな一線があった。直人にとって李奈は、手の届かない、雲の上の人だった。それが、嵐に閉じ込められたこの狭い一室で、ひとつずつ、剥がれていった。完璧な仮面が。隙のない佇まいが。年上の上司としての矜持が。そして今、腕のなかにいるのは、ただ、年下の男に甘えることを覚えた、ひとりの女だった。

俺だけが知っている。この人の、昼の顔と、夜の顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——